

ゲルマン語動詞組織の発展段階について

斎藤 治之

I. 序

筆者はフェリス女学院大学国際交流学部紀要『国際交流研究』第4号においてゲルマン語動詞4基本形を例に挙げて、ゲルマン語の動詞組織の特徴に関する指摘を行った¹。それによれば、ゲルマン語の特徴は語根が本来表すAktionsartとは無関係に、動詞が有する音韻構造に従って、語根をI類からVII類までの母音交替のパターンに組み込みそれに基づいて1.不定詞、2.過去単数形、3.過去複数形、4.過去分詞形を形成する、という点にある(例：I類 1.CeiC-(> CīC-) : 2.CoiC- (> CeiC-) : 3.CiC- : 4.CiC- (ahd. *grīfan* (nhd. *greifen*) : *greif* : *griffum* : *gigriffan*; II類 1.CeuC- (> CioC-) : 2.CouC- : 3.CuC- : 4.CuC- (ahd. *biogan* (nhd. *biegen*) : *boug* : *bugum* : *gibogan*); III類 CeRC- : CoRC- (> CaRC-) : CRC- (> CuRC-) : CRC- (> CuRC-) (ahd. *helfan* (nhd. *helfen*) : *half* : *hulfum* : *giholfan*); IV類 CeR- : CoR- (> CaR-) : CēR- (> CāR-) : CuR- (ahd. *neman* (nhd. *nehmen*) : *nam* : *nāmum* : *ginoman*); V類 CeC- : CoC- (> CaC-) : CēC- (> CāC-) : CeC- (ahd. *geban* (nhd. *geben*) : *gab* : *gābum* : *gigeban*); VI類 CoR- (> CaR-) : CōR- (> CuoR-) : CōR- (> CuoR-) : CoR- (> CaR-) (ahd. *farān* (nhd. *fahren*) : *fuor* : *fuorum* : *gifaran*); VII類 CoiC- (> CeiC-) : CēC- (> CiaC-) : CēC- (> CiaC-) : CoiC- (> CeiC-) (ahd. *heizan* (nhd. *heizen*) : *hiaz* : *hiazum* : *giheizan*))。

他のインド・ヨーロッパ諸語においてはこのようないわゆる機械的なパターン化は稀であり、祖語の最古の段階を保持すると考えられているサンスクリット語やギリシア語では動詞の語根が有す

る Aktionsart が音韻構造とは無関係に時制形式と密接に結びついており、また時制の種類もゲルマン語に比べ豊富である。しかしこのような語根の音韻構造とほとんど無関係に動詞組織を構築する言語とゲルマン語のように語根の音韻構造が動詞組織の構築に最も重要な役割を担っている言語の中間に位置する言語の存在が近年明らかになってきた。本稿ではサンスクリット語やギリシア語のような古いタイプのインド・ヨーロッパ語とゲルマン語のように比較的新しいタイプのインド・ヨーロッパ語の中間に位置すると考えられるトカラ語の例を挙げてインド・ヨーロッパ語族に属する言語の動詞組織の発展段階を辿ってみたい。

II. サンスクリット語・ギリシア語の動詞組織

サンスクリット語あるいはギリシア語においては動詞組織は 1) 現在語幹、2) アオリスト語幹、3) 完了語幹、の三種類の語幹から成り立っている。

1) 現在語幹：現在形、未完了過去形

	ai.	gr.	ide.		ai.	gr.	ide.
Sg.1	<i>ásmi</i>	εἶμι	<*és-mi	Sg.1	<i>āsam</i>	ἦα (ἦν)	<*ēs-m̄
2	<i>ási</i>	εἶ(ἔσσ <i>i</i>)	<*és-(s)i	2	<i>ās</i> (<i>ās̄s</i>)	ἦσθα	<*ēs-s
3	<i>ásti</i>	ἔσ <i>t</i> i	<*és-ti	3	<i>ās</i> (<i>ās̄d</i>)	ἦσ <i>t</i> (ἦν)	<*ēs-t
Pl.1	<i>smáh</i>	ἐσ <i>μ</i> έν	<*s-més	Pl.1	<i>āsma</i>	ἦ <i>μ</i> εν	<*ēs-me
2	<i>sthá</i>	ἐσ <i>t</i> έ	<*s-té	2	<i>āsta</i>	ἦ(σ)τ <i>ε</i>	<*ēs-te
3	<i>sánti</i>	ἐν <i>t</i> ί (Dor.)	<*s-énti	3	<i>āsan</i>	ἦν (Dor.)	<*ēs-ent
	ai.	gr.	ide.		ai.	gr.	ide.
Sg.1	<i>bhárāmi</i>	φέρω	<*b ^h érō	Sg.1	<i>ábharam</i>	ἔφερον	<*é-b ^h er-om
2	<i>bhárasi</i>	φέρεις	<*b ^h ér-esi	2	<i>ábharah</i>	ἔφερες	<*é-b ^h er-es
3	<i>bhárati</i>	φέρει	<*b ^h ér-e-ti	3	<i>ábharat</i>	ἔφερε	<*é-b ^h er-et

Pl.1	<i>bhārāmaḥ</i>	φέρουμεν	<*b ^h ér-o-mes	Pl.1	<i>ábharāma</i>	έφέρουμεν	<*é-b ^h er-o-me
2	<i>bhāratha</i>	φέρετε	<*b ^h ér-e-te	2	<i>ábharata</i>	έφέρετε	<*é-b ^h er-e-te
3	<i>bhāranti</i>	φέροντι	<*b ^h ér-o-nti	3	<i>ábharan</i>	έφερον	<*é-b ^h er-o-nt

2) アオリスト語幹：語根アオリスト形、sアオリスト形

	ai.	ide.	gr.	ai.	ide.	gr.
Sg.1	<i>ádām</i>	<*é-deh ₃ -m	(έθηκα)	<i>ánaiṣam</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξα)
2	<i>ádās</i>	<*é-deh ₃ -s	(έθηκας)	<i>ánaiṣīs</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξας)
3	<i>ádāt</i>	<*é-deh ₃ -t	(έθηκε)	<i>ánaiṣīt</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξε)
Pl. 1	<i>ádāma</i>	<=*é-dh ₃ -me	(έθεμεν)	<i>ánaiṣma</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξαμεν)
2	<i>ádāta</i>	<=*é-dh ₃ -te	(έθετε)	<i>ánaiṣta</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξατε)
3	<i>ádur</i>	<=*é-dh ₃ -ent	(έθεσαν)	<i>ánaiṣur</i>	<*-nēiH-s-	(έδειξαν)

3) 完了語幹：完了形

	ai.	gr.	ide.
Sg.1	<i>(bubodha)</i>	λέλοιπα	<*le-lóik ^u -a
2	<i>(bubodhita)</i>	λέλοιπας	<*le-lóik ^u -tha
3	<i>(bubodha)</i>	λέλοιπε	<*le-lóik ^u -e
Pl.1.	<i>(bubudhima)</i>	λελοιπάμεν	<*le-lik ^u -mé
2.	<i>(bubudha)</i>	λελοιπάτε	<*le-lik ^u -é
3.	<i>(bubudhur)</i>	λελοιπάσι	<*le-lik ^u -r

Ⅲ. トカラ語の動詞組織

トカラ語とは現在の中国新疆ウイグル自治区の都市トルファン、クチャを中心に用いられていたインド・ヨーロッパ語族の言語で、6世紀から8世紀にかけての文献が残されている。前述の諸都市の方言に基づいてそれぞれトカラ語A、トカラ語Bの2方言に分類される²。トカラ語はヨーロッパのシルクロード探検隊により発見され20世紀初頭に解読された言語で、その研究の歴史は

ドイツを中心に約100年にすぎないが、ヒッタイト語に次いで2番目に早くインド・ヨーロッパ祖語から分離したために驚くほど古い特徴が保持されており、初期の研究段階から人々の関心を集めていた。しかし後にトカラ語を消滅に追いやった非インド・ヨーロッパ語のウイグル語の影響も大きく、新旧兼ね備えた言語的特徴を示している。

III. 1 トカラ語における現在形および過去形の語幹

1) 現在語幹：現在形 (Präsens) は次の12のタイプに分類される

1. Prs.I : テーマ母音によらない現在形 (Sg.3 A *pälkäṣ*, B *palkäṃ* < **b^hleg-*),
2. Prs.II : テーマ母音による現在形 (Sg.3 A *ākeñc* (3.Pl.), B *āsäm* < **h₂eǵ-e/o-*),
3. Prs.III : e-a現在形 (Sg.3 A *wikatär*, B *wiketär* < **uig-o-*),
4. Prs.IV : o-a現在形 (Sg.3 A *aratär*, B *orotär* < urtoch. **ār-æ-* < = **h₂orH-o-*),
5. Prs.V : *ā*現在形 (Sg.3 A *śwāṣ*, B *śuwaṃ* < **ǵjuh₂-*),
6. Prs.VI : *nā*現在形 (Sg.3 A *pällāntär* (3.Pl.Med.), B *pällätär* < urtoch. **päl-nā-tär* < **(s)pl-n-H-*),
7. Prs.VII : *n*現在形 (B *kättänkäm* < **d^hg^{uh}-n-h₂-*, A *kätkanam* (Prs.VI)),
8. Prs.VIII : *s*現在形 (Sg.3 A *aräṣ*, B *eršäm* < **h₃r-se/o-*),
9. Prs.IX : *sk*現在形 (Sg.3 B *wāskäṣṣäm* < **u(a)ǵ^h-sk^e/o-*),
10. Prs.X : *näsk*現在形 (Sg.3 *tämnäštär* B *tänmastär* < urtoch. **täm-näsk-*),
11. Prs.XI : *säsk*現在形 (Sg.3 A *oksisam*, B *auksäṣṣäm* < urtoch. **āuk-säsk-*),
12. Prs.XII : *ññ*現在形 (Sg.3 B *mäntam*, *mäntaññem* (3.Pl.) < **mñt-ñh₂-jo-*)

2) 過去語幹：過去形(Präteritum)には次の5種類³が存在する

1. Prt.I(過去第1類) (AB *kärs* "wissen" - Prt.Sg.3 A *śärs*, B *śarsa* "wusste" <*(s)kers- (語根アオリスト))

Prt.I	Toch.A	Toch.B	
Sg.1 <i>śärsā</i> <*(s)kers-	Pl.1 <i>krasamäs</i> <*(s)kros-	Sg.1 <i>śärsāwa</i>	Pl.1 <i>śärsām</i> <*(s)kers-
2 <i>śärsāšt</i>	2 <i>krasas</i>	2 <i>śärsāsta</i>	2 <i>śärsās</i>
3 <i>śärs</i>	3 <i>krasar</i>	3 <i>śarsa</i>	3 <i>śärsāre</i>

2. Prt.II(過去第2類) (AB *kärs* "wissen" - Prt.Sg.3 A *śasärs* "ließ wissen" <= *ske-skors-, B *śarsa* <*skērs- あるいは*ske-skors-)

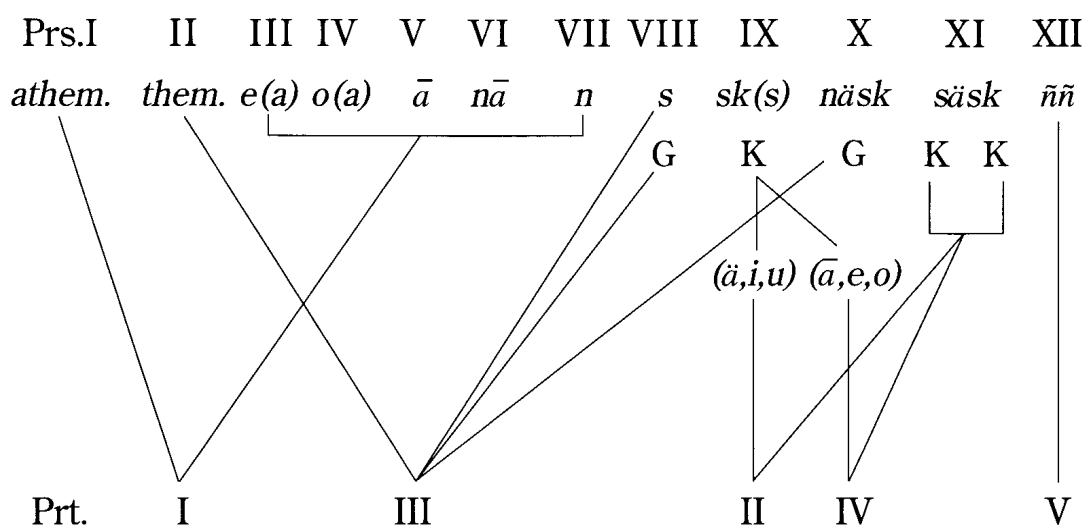
3. Prt.III(過去第3類) (A *prak*, B *prek* "fragen" - Prt.Sg.3 A *prakäs*, B *preksa* "fragte" <*prē/ok-s- (s アオリストあるいは完了形))

Prt.III	Toch.A	Toch.B	
Sg.1 <i>prakwā</i> <*prē/ok-s-	Pl.1 <i>pramäs</i>	Sg.1 <i>prekwa</i> <*prē/ok-s-	Pl.1 <i>prekam</i>
2 <i>prakāšt</i>	2 * <i>prakäs</i>	2 <i>prekasta</i>	2 * <i>prekas</i>
3 <i>prakäs</i>	3 <i>prakär</i>	3 <i>preksa</i>	3 <i>prekar</i>

4. Prt.IV(過去第4類) (A *winās*, B *wināsk* "verehren" - Prt.Sg.3 A *wināṣā-m*, B *wināṣa* "verehrte")

5. Prt.V(過去第5類) (AB *we* "sagen" - Prt.Sg.3 AB *weñā* "sagte")

現在形(Prs.)と過去形(Prt.)の関係は以下の表で示される⁴：



(G=Grundverb, K=Kausativ)

トカラ語の過去形の大半はPrt.I（過去第1類）とPrt.III（過去第3類）に属するが、この表からトカラ語においては“テーマ母音によらない活用”に属するPrs.I,Prs.V,Prs.VI,Prs.VIIおよびテーマ母音として-*o*のみが現れるPrs.III,Prs.IVは起源的に語根アオリストに遡るPrt.I（過去第一類）に、“テーマ母音による活用”に属するPrs.II,Prs.VIIIおよび使役動詞以外のPrs.IXは起源的にsアオリストと完了の融合形であるPrt.IIIに対応することが分かる。

ここで注意すべきは、語根アオリストはインド・ヨーロッパ語では意味的に《非継続的》、つまり《完了的》なAktionsartを有する語根（アオリスト語根（Aoristwurzel））から造られ、またsアオリストは意味的に《継続的》、つまり《未完了的》なAktionsartを有する語根（現在語根（Präsenswurzel））から造られるということである⁵。そこで語根アオリストに遡るトカラ語過去第一類とsアオリストに遡るトカラ語過去第三類はそれぞれアオリスト語根、現在語根から造られることがインド・ヨーロッパ語に見られる原則に従っていると考えられる。実際トカラ語の過去第1類は、語源が分かっている語根に関して、アオリスト語根によるものが大半であるが、本来語根アオリストを造らない“現在

語根”による過去形も以下のように存在する。

palk: A *palkāt*, *palkāte* (3.Sg.Med.) (vgl. gr. $\phi\lambda\epsilon\gamma\omega$ < **b^hleg-*, lat *fulgō* < **b^hlg-*)

tsik: B *tsaikānte* (3.Pl.Med.Prt.I) (vgl. ved. *dehat* (Prs.Konj.) < **d^heig^h-*, jav. *dišta* (Prs.Inj.) < **d^hig^h-*, got. *digan* (Inf.) < **d^hig^h-*, lit. *žiedžiù* (Sg.1.Prs.) < **d^heig^h-*)

また、語源が分からない語根に関しては、過去第一類はその多くが *CeiC*, *CeuC*, *CeRC* という音韻構造を持つ語根によっていることが分かる。

CeiC: *rit* A *ritāt* B *ritāte*, *CeuC*: *prutk* A *protkar* B *prautkar*, *CeRC*: *mālk* A *mālkānt* B *mālkāte*

III. 2 トカラ語の動詞系列と過去分詞

III. 2.1 トカラ語の過去分詞

トカラ語ではゲルマン語の場合と異なり動詞系列 (Averbo) は <現在形—接続法—命令形—過去形—過去分詞> という 5 形によって表される⁶。

A *ar*: Prs.VIII *arāṣ* — Konj.VII *arāntār* — Ipv. III *parsār* — Prt. III *arsāt* — P.P. *aru*

B *er*: Prs.VIII *erṣām* — Konj.I *ertār* — Ipv. III *persat* — Prt.III *ersate* — P.P. *eru*

すでに前述の表で現在形 (Prs.) と過去形 (Prt.) の関係を図示したが、トカラ語はゲルマン語と比べて“接続法、命令形、過去分詞”が加わった極めて複雑な動詞形列を形作っている。その中で

も過去形と密接な関係にあるのが過去分詞である。過去分詞は主にインド・ヨーロッパ祖語の完了分詞に基づいているが、ここではゲルマン語との関連で過去第1・2・3類のみを扱いたい。

1) 過去第1類Ia: 過去分詞は完了分詞に特有な語頭音節の重複を示さないが、これは複数形においてその活用が等しい語根アオリストと完了が、以下のように、定形のみでなく分詞においても融合した結果であると考えられる。

$C(R)(i/u)CH-$ (Aor.Part.) : $Ce-C(R)(i/u)CH-$ (P.P.) > urtoch. $C(R)\bar{a}C\bar{a}- \Rightarrow C(R)(i/u)C\bar{a}-$

(z.B. A *muso*, B *musau* (< *mus* "aufstehen"))

$C(R)RCH-$ (Aor.Part.) : $Ce-C(R)RCH-$ (P.P.) > urtoch. $C(R)\bar{a}RC\bar{a}$
(z.B. A *kälpo*, B *kälpau*)

2) 過去第1類Ib1: 過去分詞はsk-現在語幹に基づいている。

sk-Präs.: $CH(-s\acute{k}e-/-se-/-dhs\acute{k}-/-lo-)-$ > urtoch. $C\bar{a}(-\ss\bar{a}-/\s\bar{a}-/-cc\bar{a}-/-l\bar{a}-)-$

Prät.Ib1: urtoch. $C\bar{a}(-\ss-/-\s-/-cc-/-l-)-$; P.P.Ib1 urtoch. $C\bar{a}e-C\bar{a}(-\ss-/-\s-/-cc-/-l-)-$ > $C\bar{a}-C\bar{a}(-\ss-/-\s-/-cc-/-l-)-$ (z.B. A *pāpsu*, B *papāssu* (< *pāsk* "hüten"))

3) 過去第1類Ib2: 過去分詞の語根母音はo階梯に遡り、この形が祖語の完了形や使役形と係わりがあることを物語っている。

Prt.Ib2: $C(R)o(i/u/R)(C)-H-$ > urtoch. $C(R)\bar{a}e(i/u/R)(C)\bar{a}-$ > $C(R)\bar{a}(i/u/R)(C)\bar{a}-$

P.P.Ib2: $Co-C(R)o(i/u/R)(C)-H-$ > urtoch. $C\bar{a}e-C(R)\bar{a}e(i/u/R)(C)\bar{a}-$ > $C\bar{a}e-C(R)\bar{a}(i/u/R)(C)\bar{a}-$ > $C\bar{a}-C(R)\bar{a}(i/u/R)(C)\bar{a}-$ (z.B. A *kākärpu*,

B *kakārpau* (< *kārp* "(her)absteigen")

4) 過去第2類：過去分詞の語根母音はe階梯に遡るがその起源については明らかでない。

P.P.II: $Ce-C(R)e(i/u/R)(C)- > C'e-C'(R)e(i/u/R)(C)- => C'o-C'(R)e(i/u/R)(C)- > \text{urtoch. } C'æ-C'(R)ä(i/u/R)(C)-$

(z.B. A *tatriku* (< **-trik-*) (P.P.III) : A *caccrīku* (< **-treik-*) (P.P.II))

5) 過去第3類：過去分詞の母音の音韻構造によって異なる：

① $C(R)e(i/u/R)(C)-$ という構造の語根による過去分詞は祖語の完了能動分詞に遡る。

P.P.III: $Ce-C(R)(i/u/R)(C)- > C'e-C(R)(i/u/R)(C)- => Co-C(R)(i/u/R)(C)- > \text{urtoch. } Cæ-C(R)(ä/äR)(C)- => Cæ-C(R)(i/u/äR)(C)-$

(z.B. A *papräku*, B *peparku* (< urtoch. **pæpäрку- <= *pepr̥k-*)

② $C(R)eR(H)-$ という構造の語根による過去分詞の語根はo階梯を示す。

P.P.III: $Ce-C(R)oR(H)- => Co-C(R)oR- > \text{urtoch. } Cæ-C(R)æR-$
(A *kaknu*, B *kekenu* < urtoch. **kækæen- < *ǵo-ǵonh₁- <= *ǵe-ǵonh₁-*,
vgl. lat. *meminī* < **me-mon-*; gr. $\gamma\epsilon\gamma\omicron\nu\omega\varsigma$ < **ǵe-ǵonh₁-*)

III. 2. 2 トカラ語における動詞系列の起源

1) 過去第1類Ia動詞系列：トカラ語における動詞系列の起源を探る際その最大の手掛かりを提供するのは上述の過去分詞である。過去第1類Iaに関しては現在第3・4・6類—接続法第5類—過去第1類Ia—過去分詞第1類Iaという系列が一般的である。なぜこの系列で過去第1類Iaと過去分詞第1類Ia (Iaという名称は後から付けられたものである) が結びつくかという理由は、この類の起源が祖語のアオリスト語根にあるからであり、アオリスト語根によるアオリスト形および完了形は以下のように複数において重複母音を除いてその一部の形が重なるからである。

例えば **uert* "sich umdrehen" というアオリスト語根による語根アオリスト形と完了形を以下に示すと、

語根アオリスト 完了

単数	複数	単数	複数
1 * <i>é-uert-m</i>	1 * <i>é-urt-me</i>	1 * <i>ue-uórt-a</i>	1 * <i>ue-urt-mé</i>
2 * <i>é-uert-s</i>	2 * <i>é-urt-te</i>	2 * <i>ue-uórt-tha</i>	2 * <i>ue-urt-é</i>
3 * <i>é-uert-t</i>	3 * <i>é-urt-ent</i>	3 * <i>ue-uórt-e</i>	3 * <i>ue-urt-r</i>

となり、複数1人称では語根の母音階梯と語尾、複数2、3人称では語根の母音階梯が一致することがわかる。アオリスト語根では定形のみでなく不定形である分詞においても以下のように語根の母音階梯が一致することが分かる (例: ved. *vr̥dhant-* (Aor.Part.); *vāvr̥dhvāms* (Perf.Part.) (< **uerd^h* "groß/stark werden"))。

このようにしてトカラ語においては、アオリスト語根による動詞系列では語根アオリスト形と完了形の融合により過去分詞に重複の無い形が現れることとなった。過去第1類Iaの起源となったアオリスト語根として *käl* "führen, bringen" (< **k^uelh₃*); *kälp* "erlangen, bekommen" (< **g^hrebh₂*); *lu* "senden" (< **leuH*); *mus* "auf-

emporheben"(< *meusH); tsär "sich trennen"(< *derH); tsu "sich fügen"(< *deuH)が挙げられる。これらはすべて“Set語根 (*-Hで終わる語根)”でありそれ故にトカラ語ではā (< *-H)で終わる接続法第V類を形成する(例:A lawaş, B lāwam < urtoch. *lāwā- < *læwā- < *louH-)。またアオリスト語根では現在形はテーマ母音-*o* (第3・4類)あるいは*n*-現在形(第6類)のような接辞により現在形を形成する。過去第1類Iaでは以上のようにして“現在第3・4・6類—接続法第5類—過去第1類Ia—過去分詞第1類Ia”の動詞系列が成立する。上述したように、さらに例えばpālk (< *bⁿleg-)のような本来アオリスト語根ではなく現在語根に属する語根もその構造がC(R)euCという理由でA pālko, B pālkauという過去分詞を形成する。さらにsk現在形からトカラ祖語の時代に語根化された-tk, -skに終わる動詞⁷もその構造がC(R)e(i/u/R)(C)-であれば過去第1類Iaの過去形および過去分詞形を形成する(例:B kāsk (< *g^uhn-ske/o-) - kāskānte - kāskau; A kutk (< *g^hud-ske/o-) - kutkāte - kutko)。

2) 過去第1類Ibの動詞系列:ここでは“現在第1類Ib2—接続法第5類—過去第1類Ib2—過去分詞第1類Ib2”が代表的な系列である。過去分詞第1類Ib2は過去分詞第1類Iaと異なり重複音節を持つが、それは過去第1類Ib2および過去分詞第1類Ib2の語根母音が*o*階梯を示し、語根アオリストと接点を持たないからである。現在第6類および接続法第5類の出現の理由は過去第1類Iaの場合と同様である。

3) 過去第2類の動詞系列:ここでは現在第8(トカラ語A)・9(トカラ語B)類—接続法第9類—過去第2類—過去分詞第2類が代表的な動詞系列である。過去第2類は使役動詞過去形であり、同様に使役動詞に属する現在第8・9類と結び付くことは当

然である。

4) 過去第3類の動詞系列：ここではsアオリストに遡る過去第3類と主に完了能動分詞に遡る過去分詞第3類が結びついている。

IV. ゲルマン語の動詞系列

上述したようにゲルマン語の動詞系列は第1類から第7類まで存在し、その特徴は不定詞の語根の形がそれぞれ1. *CeiC*, 2. *CeuC*, 3. *CeRC*, 4. *CeR*, 5. *CeC*, 6. *CoR*, 7. *CoiC* のような構造を示すことを指摘した。その際第1類から第3類までの過去形と過去分詞形の *CiC—CiC* (第1類), *CuC—CuC* (第2類), *CRC—CRC* (第3類) という構造はトカラ語の過去第1類Iaの過去形 *C(R)(i/u/R)(C)(H)-* (> urtoch. *C(R)(i/u/äR)(C)ā-*) および過去分詞形 *C(R)(i/u/R)(C)(H)-* (> urtoch. *C(R)(i/u/äR)(C)ā-*) と全く同じであることがわかる。

ゲルマン語の第1・2・3類の起源も従って *C(R)e(i/u/R)(C)-* という構造を持つアオリスト語根であることが推測され、それらの語根の一つとして印欧祖語の **b^heid* "spalten" のようなアオリスト語根が考えられる⁸。この語根からはゴート語の *beitan* "beißen" (< urgerm. **beid-*) のような第1類の動詞が造られている。このようにしてゲルマン語ではトカラ語と同様に第1・2・3類に関して *C(R)e(i/u/R)(C)-* — *C(R)o(i/u/R)(C)-* — *C(R)(i/u/R)(C)-* — *C(R)(i/u/R)(C)-* というパターンが成立し、後に現在語根でも音韻的にこのパターンに適合すれば第1・2・3類の動詞系列を形成したと考えられる(例: got. *biugan* (< **b^heug^h-*) — *baug* — *bugum* — *gibugans*)。不定詞において階梯を示す第4・5類においてもそれぞれ *CeR*, *CeC* という音韻構造を持つアオリスト語根によってそれぞれ *C(R)eR-* — *C(R)oR-* — *C(R)ēR-* — *C(R)R-* (>

$C(R)uR-$ (例: got. *qiman* (< **g^uem-e/o-*)⁹—*qam*—*qēmum*—*qumans*) および $C(R)eC-$ — $C(R)oC-$ — $C(R)\bar{e}C-$ — $C(R)eC-$ (例: got. *sai^h-an* (< **sek^u-e/o-*)—*sah^v*—*sē^h-um*—*gasai^h-ans*) というパターンが成立し、第1・2・3類と同様に同じ音韻構造を持つ現在語根にも及んだと考えられる(例: got. *wisan* (< **h^ues-e/o-*)—*was*—*wēsum*—*gawisans*)。

V. おわりに

ゲルマン語においては語根の音韻構造が動詞系列の成立にいかに重要な役割を担ったかはA *lyalyänku* (P.P.II) (< **lelenk-*): *lalänku* (P.P.III) (< **le^hnk-*) ようなトカラ語の過去分詞の対と比較すれば明らかである。それに対してゲルマン語では **lenk* のような $CeRC$ という音韻構造を持った語根は第3類以外には所属することは不可能である。すでに述べたことから明らかなように、トカラ語では《非継続的・完了的》な *Aktionsart* を有する語根から過去第1類(語根アオリスト)、また《継続的・未完了的》な *Aktionsart* を有する語根から過去第3類(sアオリスト)が造られる点において、語根の音韻構造ではなく語根が有する *Aktionsart* が動詞組織に形成に一義的に結びついたサンスクリット語およびギリシア語と共通点を示すが、一方、語根(特にトカラ祖語において新しく成立した *-tk*, *-sk* で終わる語根)の音韻構造は動詞過去形の類の所属に関して大きな役割を演じる。この点においてトカラ語の動詞組織の発展段階はサンスクリット語・ギリシア語とゲルマン語の中間段階にあり、従ってゲルマン語のそれはインドヨーロッパ語において最も新しい姿を示していると考えられる。

註

- 1 斎藤治之：「インドヨーロッパ語族におけるパーフェクト（＝完了形）とゲルマン語派における過去現在動詞について」、『国際交流研究』フェリス女学院大学国際交流学部紀要第4号（2002）1-14.
- 2 Krause-Thomas: Tocharisches Elementarbuch, Heidelberg, Band I: Grammatik, 1960, 37.
- 3 正確には第6類を加えて6種類であるが、この類にはAB *käm* "kommen", AB *länt* "hinausgehen"の2つの動詞しか属しておらず、本稿のテーマとは直接関わらないため省略した。
- 4 Haruyuki Saito: On the Origin of the Reduplicated Preterite in Tocharian. In: Tocharian and Indo-European Studies, Copenhagen, Volume 7 (1997), 155-160, 158.
- 5 García Ramón: Indogermanische Wurzelpräsentia und innere Rekonstruktion. In: Früh-, Mittel-, Spätindogermanisch (Akten der IX. Fachtagung der Idg. Gesellschaft in Zürich, 1994), 53-75, 54f.
- 6 Krause-Thomas: Tocharisches Elementarbuch, Band I: Grammatik, 1960, 192f. また本稿ではAverboの系列の決定においてあまり重要な役割を果たさない“命令形”は省略した。
- 7 Craig H. Melchert: Tocharian verb stems in *-tk-*. In: Zeitschrift für vergleichende Sprachwissenschaft, 91. Band (1977), 93-130.
- 8 なぜアオリスト語根がその起源かという理由としてトカラ語と同様の語根アオリスト形と完了形の融合を挙げることができる。例えばBammesbergerは完了形に重複音節を持たない**ueid* "erblicken"による**wid-te*（完了およびアオリスト2人称複数形）のような形に二つの時制の融合の可能性を求めている。(Alfred Bammesberger: Der Aufbau des germanischen Verbalsystems, Heidelberg, 1986, 75.)
- 9 語根*g^hem* "kommen"による*g^hem-e/o-* (> urgerm. *kwem-e/a-*)という形はインドヨーロッパ語比較言語学の見地からは“接続法アオリスト形”であるが、ゲルマン語においては接続法の意味はすでに失われていたと考えられる。ゲルマン語における種々の語根の形態的起源についてはAlfred Bammesberger: Einige e-stufige Präsentien des Urgermanischen und ihr Verhältnis zu indogermanischen athematischen Wurzelaoristen, PBB (Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur) Bd.102 (1980), 339-344, 339f. 参照。